

# 木村文助研究 No. 4

通 信 2001、10、23

## せみ

尋常科2年 中谷富彦

きのう学校からかえって、ごはんをたべていると、うらの馬ごやのあたりで、せみのなきごえがきこえましたから、ごはんをはやくたべてしまって、「かっちゃん（母ちゃん）今せみとってくる」といって、いそいで、はだしになって、足おとをたてないで、ささげ畠のところを歩いて行きました。せみはまだげんきよくないていました。なっているなしの木のところ、あっち見たり、こっち見たりしたら、ちゃんと木のまっか（股）のところ、よいこえでなっていましたから、しずかに木にのぼって、せみを目がけて手をぱっとやると、せみは「ぎいぎい」となきました。おもしろくておもしろくて、ぎっしりせみをにぎって木からぼんととびおりて「かっちゃん、かっちゃん、せみとった」といって、はしってきて見せると、かっちゃんが「よくとった。かごさ入れれ」といいますから、すぐにかごに入れておきました。足を洗っているとねこがかごをにらめていましたが、がたがたとおとがしたのですぐ行って見ると、ねこがせみをくわえていました。「このちきしょう、このちきしょう」とぼう（追う）と、ねこがせみをおとしました。すぐとって見たら、あたまがありません。それをもって、かっちゃんのとこさ行って「せみ、ねこくったや」というと「そったらも（そんなもの）のなげれ」といいました。それをもって来て外におくと、あかいありだの、くろいありだのたくさんあつまって、とうとうひっばって行きました。



評 二年生の中谷君の「せみ」は、単純な叙写でもって、事象の動きと場面場面の感じとを、まざまざとしぜんによく書きうかべています。

二年生の作としては本当にうまいものです。同君が蟬の声を狙って、かんかん照っている土の上を、はだしでしのびしのび行って、木の上をじろじろさがしたり、せみを握って、「とったとった」と大喜びで叫びながら走って帰ったりするありさまや、お母さんが前後に「さあ、さあかごへお入れ」「そんなものなんかお捨てよ」

いわれる言葉の響きや、猫がにらみつけている格好や、中谷君が頭のとれた蟬を拾って上げるくやしそうにしている顔付きや、しまいに蟬の死骸を赤蟻黒蟻が群がって引っぱって行くところなど、すべてが何のたくみもなしに、ことごとく、ありありと目にみえます。特に、蟬をおさえたとき、「ぎいぎい」とないたというところなどは、いかにも実感的に生き躍っています。上っつらに読み下すと、ただありふれたことをかいた何のへんてつもない作のように軽視されるかもしれませんが、よくかみしめてよむとあれだけの僅少な言葉、単素な叙写が、上に言ったようなありのままの事象を遺憾なく可愛く表出しています。把握がしっかりしているからです。同校の生徒のいつもの作に比して、低年級なりに、ひどい地方語が殆どないところにも注意が見えます。蟬をおさえて木を下りるときに「おもしろくておもしろくて」とあるのは「愉快で愉快でたまらないという」意味の地方的表出でしょう。

(赤い鳥)

評 自然に盛上がって来た想をいきもつかずに書いたという様な作で、私は之は必ず「赤い鳥」に載ると子供に予め断言した程でした。

こういうのを見て大人が手を加えたではないかと疑う人がある。そういう人はいつでも大人は子供よりうまいと思いついて上がっている人で私等から見ると正反対な話である。子供の生活は子供でなければ本当に自然に書けるものではない。大人が筆を入れたら打ち壊しになる、善くなることは絶対はないと断言したい程である(かな遣とか誤字脱字は訂正してもよい、重複照応せぬ處は指導して児童に反省さしてもいい、本集の文はそうしたものである)嘗て私は自校のある若い教員の配布した文を見て余り大人臭いので、児童のかと尋ねて、児童作を訂正した事がわかったので、原文を見たら数層の優良さであった。夫で其長所を説明して納得させた事があった。

(木村)

.....

- 「赤い鳥」大正13年(1924)10月号に入選(推奨)の作です。
- 本集とは大野校発行の「村の子供」のことです。
- 掲載の文は新仮名遣いにしています。



## 「村の子供」後付の論文より②

第二に題材に関する点に就てである。

「児童の表現欲によって綴方が生れたとせば、多方面であるべき筈であるが、此文集は余りに人事的、ドラマ的に偏している。特別に選択したものであるか」とい

う疑問である。之に就いては、目的観、価値観を系統的に述べねば不十分であるが、吾々の内面に働く精神が如何に汎ゆる行為を支配しているかを考える時、人間的教養として、内面的精神指導の極めて重大なるを考えねばならぬ。そは勿論他の教科により間接に指導し得られない事はないが、余りに微温的である。吾等の主張する綴方は、正しく直接に手をつけんとするものであって、ここに綴方独自の立場があり、第一義的使命のありとするものである。従って綴方の価値観が、又之によって従来より幾分変容を題材の選択にも影響さるる訳である。即ち人生に価値ある内容を持ち、内面的に精神態度の正しき者が優秀なる文とさるる所以で、本集は即ち大体此標準によったものである。

要するに、綴方は厳粛な自己生活全人格の現れでなければならぬ。全人間を提しての生活の記録でなければならぬ。個性、人格のない単なる文字の羅列、記憶の再現は辛うじて綴方の範囲に入るとしても、価値の低しとするが、吾人の見解である。

然らば内面的に正しい態度とは如何なる意味か、之を例解すれば

- 1、内容を成す材料は或程度の過失でも、赤裸々の表現でもよいが、価値（大人でなく、児童にとり）あるものでなければならぬ。
- 2、然して之が表現は少なくとも純な動機に基づいた、美的態度であらねばならぬ。

然し実は以上の1は即ち2であり、2は即ち1である。巡查を翻弄した事を得々然と書いたのを読んだことがあるが、是等は書かんとする動機不純、態度真剣を欠くので読んで不快な感に打たれた。又他人の秘密を暴露し、他児童の好奇心を挑発する如き性質のものは、動機、態度が純正であつたら、綴方としてあつてもよいが、公表すべきものではない。（次号で3を掲載）



### 木村九女さん 郷土資料室へ

9月23日、伊達市の木村九女さんら親族4人で郷土資料室へ見えました。木村さんとは文助の子楠雄氏の夫人です。「赤い鳥・木村文助」の部屋へ入り感慨深げに見て、新本「村の綴り方 木村文助の生涯」（畠山義郎）と金一封を寄贈。「皆さんに宜しく、また来ます」といって帰りました。ありがとうございました。



### 渡辺秀子さん 「綴方生活」 寄贈

9月20日、去る二月亡くなった渡辺康夫氏の墓参りに友人7人で札幌出かけた折。夫人である秀子さんの書棚をふと見ると、探していた「綴方生活」を見つけ「どうぞ持って行って下さい」とのこと、有り難く戴き早速資料室へ持ち込みました。



## 森町図書館 木村文助・不二男の資料整理

このほど新聞により標記のことが公表されました。以前大野町文化財保護研究会では見学会で訪れた際見せていただき資料の多さに驚きました。大野校で実践した内容が豊富に載っていて時間を掛け閲覧したいと思っています。

### 《 日 誌 》

- 2001、4、10 「木村文助研究」通信3号発行
- 5、21 北海道教育大函館校図書館へ出向く
- 6 大野町ホームページに「つづりかた教育 木村文助」載る
- 6 - 木村文助著「村の綴り方」コピー本作製
- 6 - 児童文体の成立－木村文助と赤い鳥－（鹿児島大狩野教授）  
インターネットに載る
- 6、15 郷土資料室「赤い鳥・木村文助」コーナー図書など移動
- 6、15～25 郷土資料室「赤い鳥・木村文助」コーナー整備
- 8、2 函館新聞掲載「郷土資料室内に木村文助コーナー」
- 8、30 北海道新聞掲載「「つづり方指導業績伝えよう」
- 9、2 函館新聞寄稿掲載「大野町の宝・綴り方を後世に」
- 9、12 北海道新聞寄稿掲載「木村文助コーナー新設」
- 9、20 札幌市渡辺秀子氏より復刻版「綴り方生活」15巻戴く
- 9、23 伊達市木村九女氏ら郷土資料室を訪れる
- 10、17 森町図書館「木村文助・不二男」書棚閲覧
- 10、23 北海道新聞掲載「木村親子の資料を整理」森町図書館

.....

### 資料閲覧 「大野町郷土資料室」

北海道亀田郡大野町本町200 TEL (0138) 77・6681

大野小学校の校門入って右側

(開室) 9:00～16:00 (休室) 毎月第一月曜、臨時、年末年始

発行 041-1201 北海道亀田郡大野町本町68 町文化財保護研究会(ぶんぼけん) 木下 寿実夫 T・F (0138) 77-8535 町文化財保護審議会委員 道文化財保護協会会員
--



# 大野小で「つづり方」指導

## 「木村文助」コーナー新設



大野町文化財保護研究会会長 木下 寿実夫

このほど大野町教育委員会は、郷土資料室の一室に「赤い鳥・木村文助」コーナーを設け、本棚や掲示板を整えた。昨年は、資料室近くの木村居宅跡に、「木村文助大野小学校長と村の子供」の説明板を建てている。

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

### 実践記録や関連図書…

## 郷土資料室に200点超

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄

大野町文化財保護研究会(文保研)は一九九七年から、つづり方指導者の大野尋常高等小学校長の兼訓導木村文助の著書、論文などを収集し、会員、町民の浄財により「赤い鳥」複製版(全百九十五冊)を購入、町教委に寄



「子供」の広告が一ページ全面に載った。

同十二月号の「子守のりき」(富谷千代・高等二年)は「推奨」になり

短編小説的な近來の傑作とたたえている。

研究の素材になったつづり方も多く最近、京都

仏教大の岡屋昭雄教授が「北海道国語教育史の研

究」木村文助の場合、「鹿兒島大の狩野浩二教授

が「児童文体の成立」木村文助と赤い鳥」をそ

れぞれ学会に発表してい

て詳しい。

方言を交え素直に書か

れたつづり方が収まった

「赤い鳥」と関連図書、

木村が子供たちの魂に触

れる文に感動した実践記

録「村の綴り方」や資料

は、二百数十点にもなっ

た。資料室へ足を運んで

いたとき閲覧へのお誘い

寄稿

このほど町教育委員会は、郷土資料室の空いた1室に「赤い鳥・木村文助」コーナーを設置した。これ

「赤い鳥」とは、1918(大正7)年から1935(昭和10)年まで鈴木三重吉主宰によって東京で発刊された、児童文芸月刊雑誌のことである。

集した綴り方に毎月のように入選させた年もあり、北海道の赤い鳥学校とまで言われた人である。ぶんぼけんの活動として、歴史物あり、そして子供達

どの綴られた文を題材に、修身料とも強く関連を持たせ、現実の社会に強く生きどを動員して、物語あり、抜く子の育成に努めたのである。

また次の砂原小への実践も含め、今年発行された「砂原町史」各刊に多くのページを割きその業績が詳細に載っている。残した論文などはまだまだ埋もれているに違いない。その発掘に意を注いでいきたい。



町文化財保護研究会会長 木下寿実夫

大野町の宝「綴り方」を後世に

北海道の赤い鳥学校

までは、事務室の中に関係の本棚、掲示物があった。閲覧には不便であった。それで移動ということになり大野町文化財保護研究会(ぶんぼけん)も作業に協力し部屋を整えた。

木村は大野尋常高等小学校長兼訓導として1918(大正7)年、36歳で赴任した。10年間綴り方教育に情熱を傾け、「赤い鳥」が募

購入した「赤い鳥」複製版全195冊を寄贈すると共に木村の編著書6冊、関連の図書、論文などの収集に努めてきた。原本を集めるのは困難で借用した本からコピーさせてもらったもの

由面が載っている。その中には「赤い鳥」に載った文も大野校の綴り方が8年に含め、方言が入り素直に書いた綴り方と彼の最初の世に問う論文と思われる内容とで構成されている。また「村の綴り方」は、実践記

木村を中心として、家庭、友達、村の出来事な録と言つべきもので、後の

大野町郷土資料室(大野町本町200) 大野小学校(大野町200) 77・66801。